

## 第二次盗賊戦争

テキサスに対し、これまでとは全く異なる攻撃がラ・ハリタから行われようとしていた。新たに攻撃拠点となったラ・ハリタは、前年の盗賊戦争の舞台となったリオグランデ・ヴァレーから二百マイル上流にあるタマウリパス州ヌエボ・ラレドから19マイル南に位置している。1916年6月8日、小さな一団が河を渡り、郊外の農場で働いていたラレドの住人シモン・ソリスを捕らえ、メキシコへ拉致してガイドにした。6月10日の夜、憲政軍将校、ピヤレアル中佐、ノルベルト・ペサ大尉、二人の中尉を含む三十人の一団がテキサスに入った。ラレドの北二十マイルのウエップで、電話線を切断し、灯油を鉄道の橋桁に染込ませた。ペサ大尉以下全員、アメリカを攻撃する事は、アメリカに入るまで知らされていなかった。彼等は憲政軍の制服を着ていたが、赤地に白で「平等・独立・自由」と斜めに書かれた旗を持っていた。彼等が丁度点火しようとしていた時、アメリカの諜報員の知らせを受けた騎兵隊が駆けつけた。小競り合いの末、ペサ大尉、シモン・ソリス、アントニオ・クエバスの三人が捕虜になり、三人のメキシコ人将校が死亡、負傷者数名と残りの兵士は逃げた。米軍の犠牲者はなかった。101

ペサは戦争捕虜としてではなく、一般の犯罪人として扱われたことに激怒した。彼はジェネラル・マウリリオ・ロドリゲスの命によりピヤレアル中佐の下に配属され、軍人として単に命令に従ってアメリカ側に侵入していた。ペサはカランサの国防・海軍省長官アルバロ・オブregon宛てに公開文書を送り、彼の部隊は憲政軍上官の指揮に従ったもので、無罪であると主張した。

一方、アントニオ・クエバスはロスアンゼルスにいた頃、フロレス・マゴン兄弟に会ったことがあり、機会あるごとにリヘネラシオンを読んでいた。彼はメキシコ人に対する間違った仕打ちに報復し、テキサスを解放するために、ラ・ハリタで部隊に加盟した。カランサに対して猜疑心を抱いていたアメリカ側は国境騒擾の責任はカランサにあるとして、クエバスを無視した。一方、アメリカの諜報機関はPSDの陰にPLMがある、と考えていたのがクエヴァスによって裏付けられたとした。102

ウエップ攻撃から五日目の夜11時、憲政軍大佐イサベル・デ・ロス・サントスの指揮する七十五人の攻撃隊がラレドの南東五十マイルにあるサンイグナチオ米軍基地を攻撃した。第十四騎兵大隊のM部隊は二時間前にI部隊によって増強されていたことをメキシコ軍は知らなかった。戦死したクルス・ルイス少佐のメキシコ軍は勇敢に戦ったが、アメリカ軍によって押し返された。デ・ロス・サントスはPSDの信奉者で、デ・ラ・ロッサの熱心な支持者であった。アメリカ軍は捕虜五人、爆弾三十二個、四十五ポンドのダイナマイトを捕獲した。メキシコ人に交じって数人の日本人がいた。メキシコ側は死者九人負傷者四人、アメリカ側はそれぞれ四人と十五人であった。サンイグナチオの対岸にいた憲政軍隊長はアメリカ軍に協力し、重傷を負った三人を含む十八名を逮捕し、裁くためモンテ

レーへ護送した。デ・ロス・サントスのかきあつめた三百人の部隊は離脱者が続出したため七十五名に減ってはいたが、P S Dの息吹をまだ充分に感じさせるものであった。103

多くのラレド住民は恐れおののき、日本人が砂糖キビの茎を使ったスノーケルで、水中を潜って渡河するのを見たという噂が流れた。ラレドにある憲政軍の機関紙「エル・プログレソ」がアメリカを非難する長文の記事を発表するや、怒った市民が事務所に押し入り、編集者レオ・ウォーカーを引きずり出し、ラレドの北にある渡河地点、エル・パソ・デル・インディオで彼をメキシコへ追い返すと、事務所に戻り印刷機を叩き壊した。ラレドの新聞はメキシコの山賊が近くの灌木の中に潜み、我々を地獄に落そうと狙っている、と書きたてた。6月19日ラレド・タイムスは「最も邪悪な試み」と題し、何者かが、リオグランデの河沿のダウントウンを見下ろすウルスラ修道院に押し入ろうとし、直ちに兵士と警官が駆けつけたため、闖入者は河沿いの茂みに潜り込んだ。それが日本人であったかどうか不明と報じた。104

捜査局の諜報員はジェネラル・リカウトの果たした役割を高く評価した。リカウトはP S Dの台頭を阻止したのみならず、ウエップとサンイグナチオでの損害を最小限に止めた。しかし、リカウトはリオグランデの上流地域に勢力を集中したため、地元の取締りが手薄になっていた。サンイグナチオの攻撃が始まろうとしていた6月15日、百八十マイル河口へ向かったブラウズヴィルに近いサンベニートでアメリカの部隊が二十四人ほどのメキシコ人と交戦した。アメリカ軍はメキシコ人の一団に向けて発砲し、後で一人の遺体を発見した。

ブラウズヴィルにあるフォート・ブラウンの指揮官ジェネラル・ジェームス・パーカーは第三騎兵部隊のA. D. ニューマン大尉の騎兵五十にメキシコ人追討を命じた。ニューマンは6月16日の深夜、基地を出発して河岸まで追いかけ、更に馬を泳がせて対岸へ渡る決心をした。ニューマンは一マイルほどメキシコへ侵入し盗賊を攻撃し、二人を殺した。パーカーはニューマンに援軍を送る決心をし、6月17日午後1時30分エドワード・アンダーソン少佐は、第三騎兵大隊から三部隊、機関銃部隊、歩兵二十人と共に出発した。小舟二艘と無線機をトラックに積んでいた。

その日の午後六時、二百人の遠征部隊はメキシコに入りマタモロスへ向かい、七マイルほど西で野営をした。フンストンは翌朝引き揚げる指示を出した。明らかにパーカーの越権行為であった。機関銃部隊や大部分のニューマンの部隊は無事河を渡り、一部隊が残っているところへ憲政軍が発砲してきた。アンダーソンの撤退をアメリカ側から護っていたロバート・ピュラード大佐は直ちにアメリカ側から援護射撃をすると共に、残された騎兵の反撃を認めた。騎兵は犠牲者を出すことなく憲政軍部隊を追い返した。メキシコ側の犠牲者は二人であった。アンダーソンが迫っていたとき、ジェネラル・リカウトは彼の守備隊をマタモロスから撤退させた。

リカウトは矛盾する状況に直面していた。国の威信にかけて外国の侵略を排除しなくて

はならない一方で、P S Dの取締りを行っていた。リカウトは女子供を町から退去させた。彼の部下に対しては侵略したアメリカ軍と戦うことを命じ、そのことをジェネラル・パーカーに伝えた。105

101. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P146
102. Ibid. P147
103. Ibid. P147
104. Robert Mendoza, "The Lonsome Death of Jesse Mosley Laredo 1916", LoareDOS Vol XI#1,P4
105. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1904", University of Oklahoma Press, 1992, P148